

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

花は今でも美しく

北辰中学校三年 富田 怜奈  
とみた れな

受賞の言葉

この度は優秀賞を頂けて、とても嬉しく  
思っています。人とのつながりの輪をテ  
マにこの話を書きました。誰かが作り上げ  
たつながりを他の誰かが引き継いでいく、  
そのことの大切さが少しでも伝わればい  
なと思います。

「お花のおばあちゃんが亡くなったそうなんです。」  
智葉は、幼馴染の明日香から告げられたその言葉に、しばらくの間思考が停止した。

外はむせかえるような暑さに包まれ、セミたちの声が激しく鳴り響く夏休み。智葉と明日香は二人で夏期講習へと向かっている途中だった。「お花のおばあちゃん、ずっと入院してたんですって。」

明日香がぼつりと落とす言葉に、智葉はそうなんだ、と適当に相槌を打っていた。そっか、お花のおばあちゃん、死んじゃったんだ。暑さのせいか妙にふわふわする智葉の脳内で、それはいまだに真実として飲み込められずにいた。そして幼い頃のお花のおばあちゃんとの思い出が、智葉の脳裏に鮮やかに蘇った。

智葉がお花のおばあちゃんと初めて出会ったのは、今から約十年前、智葉と明日香がまだ四歳か五歳位の頃だった。穏やかな日差しが心地よいある春の日、明日香に誘われて近所の公園に遊びに行った時のことだ。その公園は、智葉と明日香のお気に入りの遊び場所だった。花壇が公園の敷地の半分程度を占めており、いつでも四季折々の美しい花たちがその公園に訪れる人々を迎えていた。二人はその美しい花壇の花たちを眺めるのが好きだった。だが、智葉と明日香は、それまで花壇を世話する人を見たことがなかったのだ。どうしていつもたくさんのお花が綺麗に咲いているのだろうか、と疑問を感じたことがなかった。

「きつと、ここのお花はみんなすごいね。」その幼い彼女たちの考えが違ふということも教えてくれたのは、お花のおばあちゃんだった。「ねえ智葉ちゃん、あそこであの人は何をしているのかしら？」  
そう言っただけを指さす明日香。その指と視線の向かう先に目をやると、公園の奥の方で誰かが花壇の土を掘り返していた。

「そんなことしちゃだめだよ！お花が枯れちゃうよ！」

その光景を見て、いてもたってもいられなくなった智葉と明日香は、その行為をやめさせるべく、大きな声でそう叫びながら走っていった。

「うん？一体どうしたんだい？」  
二人の声に気づいて土を掘っていた人物は顔を上げた。七十代位と思われる、小柄で優しくな顔をした老女だった。

「そ、その土は掘っちゃだめなんだよ！お花が枯れちゃうよ？」  
初対面の人に怯え、少し怖気付きながらも、智葉は必死にその行為を止めようとした。するとその老女は一度びつくりした顔をしてから、ふふっと笑い始めたのだった。どうして笑われるのか分からず、智葉と明日香はぽかんと口を開けたまま、ただただその老女を見つめていた。  
「ふふつ、大丈夫よ。今ね、枯れたお花の代わりに新しいお花の種を蒔いているところなのよ。」

にこにこ笑みを浮かべながら老女は二人にそう言った。  
「お花の種？お花は何もしなくても咲くものじゃないの？」  
明日香の問いに、老女はまたふふつと笑いながら

「お花は何もしなかったら綺麗には咲いてくれないのよ。愛情をかけて大切に育てたらその愛情の分だけ、お花は綺麗に咲くのよ。」  
と、二人に教えてくれた。

「それならこの綺麗なお花は全部、誰かが大切に育てているの？」  
明日香の言葉に、老女はこくりと頷いた。  
「もしかして、おばあちゃんがここのお花のお世話をしているの？」

そう智葉が思い切っただけ聞いてみると、老女は嬉しそうに顔を輝かせて、  
「そうよ。ここのお花は私が育てているの。」  
と答えた。それを聞いて智葉と明日香は、口々に

「おばあちゃんすごいね！お花とっても綺麗だよ！」  
「うん、ここのお花、お店で見るのよりも綺麗なんだもの！」  
と、老女を褒めたたえた。すると老女は照れたように頬を少し赤らめて、

「ありがとう。そう言ってもらえると、私も育てているかいがあるなあ

と思うわ。」

と、嬉しそうに言った。その日から、二人の中でその老女は尊敬すべき対象となった。二人は老女のことを、親しみと敬意を込めて、「お花のおばあちゃん」と呼んだ。

それから二人は、公園に行ってお花のおばあちゃんに会うたびに、沢山のことを教えてもらった。優しく、お花などの植物を大事にしているお花のおばあちゃんは、お花の育て方はもちろん、お花の種類や色、花言葉等を二人に丁寧に教えてくれた。今まで全く聞いたことのなかった話に、二人はいつも目を輝かせて真剣に耳を傾けた。お花のおばあちゃんはそんな二人の姿を見ては、にこにこ嬉しそうに笑うのだった。

ある日、智葉と明日香がいつもと同じように公園に向かうと、お花のおばあちゃんが数人の大人と子供に囲まれていた。どうやら喋り声や笑い声が聞こえることから、楽しい時間が流れているようだった。智葉と明日香が近づいていくと、それに気づいたお花のおばあちゃんが、

「ともちゃん、あつちゃん、おはよう。」  
と手を振ってくれた。それを見て、それでは私達はこれで、と周りにいた人達が帰っていった。

「今の人たちと何をお話していたの？」

明日香が聞いた。するとお花のおばあちゃんは嬉しそうな顔をして、

「ここのお花、綺麗って有名なんですよって声をかけられたのよ。」  
と言った。今では、町内の人はもちろん、町外の人も綺麗な花を見にこの公園へ訪れることも珍しいことではなくなっていた。それだけ、この公園の花壇の美しさが有名になってきたのだ。智葉と明日香はそれを聞いてとても嬉しく思った。お花のおばあちゃんは、

「私の育てたお花で、この地域がもっと明るくなるのはとても嬉しいわ。自分の好きなことで皆とのつながりの輪が広がるなんて、とつても素敵。」

と嬉しそうに微笑みながら言った。それを見て、智葉と明日香の二人も

益々嬉しい気持ちに包まれたのだった。

こんなふうに智葉と明日香の二人は、小学校低学年の頃までは毎日のように公園に通い、お花のおばあちゃんとお話しをしたり、お花を育てる手伝いをしたりしていた。しかし、高学年になると、他の町にいる友達達の所へ遊びに行ったり、家の中でゲーム等をして遊ぶことが多くなり、だんだん公園に行かなくなって、お花のおばあちゃんとも会う機会が無くなってしまった。それでも、まだ小学校の間は公園に行ってお花を見たりお花のおばあちゃんとお話ししたいな、と思うことも少なくなかったが、中学校に入学してからは、大量の宿題や難しい勉強、忙しい部活でいっぱいになってしまいい、公園のこともお花のおばあちゃんのこと、二人の中から少しづつ薄くなってしまっていた。そして時は流れ、いつの間にか中学三年生の夏になっていたのだった。

「…葉、智葉！どうしたんですか？ぼーっとして。」

突然聞こえた声に、智葉の意識がはつ、と現実に戻った。目の前には智葉を心配して、ずいっと顔をのぞき込ませる明日香がいた。

「あ、明日香！ごめんね、あたしちよつとぼーっとしちゃってたみたい。」  
えへへ、と笑う智葉を見て、明日香が

「今日の帰り、ちよつと公園に寄ってみませんか？」  
と言った。

「…うん。あたしもそうしようと思ってた。」

智葉も明日香も口には出さなかったが、なんだか今日、どうしても公園に行かなければならない気がしていた。その日の夏期講習の授業はなんだかいつもよりも長く感じられて、授業の内容もあまり頭に入らなかった。日が落ち始めてからやつと今日の分の授業が終了し、二人は少し早足で公園へと向かった。道中、二人とも一言も言葉を発することはなかった。しばらくして二人は公園に着いた。智葉は足ががたがた震えていた。自分が何におびえているのかは分からなかったが、公園に入る

のを躊躇してしまった。隣を見ると、どうやら明日香も同じようで、公園に入るのを躊躇しているようだった。二人は顔を見合わせ、こくりと一回頷き合ってから、恐る恐る公園内へ一步を踏み出した。公園の中には、あの頃と変わらない花壇があった。そこでは、色とりどりの花が夕日に照らされて、キラキラと輝きながら咲いていた。

「…どうして、こんなに綺麗に咲いているの？お花のおばあちゃんは死んじゃったんじゃないの？」

智葉の口から信じられないというように、言葉がぼろぼろと零れた。明日香も目を見開いていて、状況が飲み込めずにいるようだった。その時、「あの、あなた達もお花にお水をあげに来たのかしら？」

と突然後ろから声をかけられた。驚いて二人が振り返ると、そこには小さい男の子を連れた女性が、ジョウロを持って立っていた。

「水、ですか？」

明日香がそう聞くと、

「そうよ。水。ここのお花が枯れないように、この近所の人達で水をやっているの。」

と女性が教えてくれた。

「でもこの花壇はお花のおばあちゃんが…」

智葉は言ってからあつ、と思つた。お花のおばあちゃんは智葉と明日香だけが呼んでいた名前なので、この女性に言っても分からないと思つたのだ。

「お花のおばあちゃん？もしかしてミツキおばあちゃんのことかしら。」だが、そんな智葉の考えは杞憂に終わったようだ。そういえば、お花のおばあちゃんの本当の名前はミツキ、だった。

「そうです。ミツキさんのことです。ここの花壇はミツキさんがお世話をしていたと思うんですが…」

「ええ、元々ここのお花たちを育てていたのはミツキおばあちゃんよ。でも、一年位前に入院してからは、近所の人達で協力してお水をあげて

いるの。せつかくこんなに綺麗な花壇だものね。ミツキおばあちゃん、今はもう帰らぬ人になってしまったけれど、これからは皆でこの花壇のお花を育てていくわ。」

私の育てたお花で、この地域がもっと明るくなるのはとても嬉しいわ。自分の好きなことで皆のつながりの輪が広がるなんて、とっても素敵。

いつかのお花のおばあちゃんの言葉が、二人の頭によぎり、心の底に熱い何かが込み上げてきた。

「そのジョウロ、借りてもいいですか？」

溢れる感情を押し殺した声で、智葉が言つた。

「いいわよ。後からあそこのジョウロ置き場に戻しておいてね。」

女性はそう言ってから智葉にジョウロを渡し、男の子と一緒に手を繋いで帰って行つた。

「水、あげよう。」

水を汲み、お花へやつた。ジョウロから水が流れていくのと同時に、二人の眼からは涙が溢れていった。誰もいなくなった公園で、智葉と明日香は静かに泣いた。この公園に来て今の話を聞いて、もうお花のおばあちゃんはどこにもいないんだということが、やつと現実となつて感じられた。公園に入るのを躊躇つたのは、きつとこうなることが二人とも分かっていたからだ。どうしようもない悲しみが、二人に襲いかかった。それでも二人はこれともうひとつ、お花のおばあちゃんの思いはちゃんとながつていたこと、皆のつながりの輪ができたことも知ることができた。それを思うと、嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。二人の涙は日が暮れる頃まで、止まることは無かつた。

帰り道、話を切り出したのは智葉だった。

「今度また、お花に水あげに行こうよ。」

「ええ。お花のおばあちゃんのお墓参りも行きたいですね。それで報告しましょう。花壇、皆で大事にしていけますよって。」

「そうだね。お花のおばあちゃんが今まで育ててきたお花、そしてお花のおばあちゃんから広がっていったこのつながり、次は私達が守り、広げていく番だよ。」

「はい、私もそう思います。」

そこで智葉は足を止め、空を見上げた。雲一つない満天の星空がそこにはあった。智葉は空の上で、お花のおばあちゃんが二人を見ていてくれるように思った。

「ありがとう、お花のおばあちゃん。」

智葉は小さく呟いた。星が嬉しそうにキラキラと輝いていた。

